

現 代 教 育 論 シ ケ プ リ			
2005 年度夏学期	火曜 3 限	丹野義彦教官	

○使用上の注意

- ・このシケプリ使用は本人の許可がとれていないため内密にお願いします。
- ・このプリントには「たんの先生」「キョウコさん」「イクオ君」「ロンちゃん」というキャラクターが登場しますが、それはフィクションであり実在の人物とは関係ありません。

第 1 回 (4 月 19 日) ―科目説明―

たんの先生「教育の分類としては3つあって、それは**家庭教育、学校教育、社会教育**なんだよ。」

キョウコさん「それじゃあ、その3つについてそれぞれ見ていけばいいんですね。」

たんの先生「まあそういうことになるかな。でも、教育を考えていく上では更に、**5つのポイント**を押さえておく必要があるんだ。」

イクオ君「5つのポイント?」

たんの先生「そう。**制度・思想** (System)、**方法** (Method)、**心理** (Psychology)、**評価** (Evaluation)、**病理** (Dysfunction) の5つだ。」

ロンちゃん「Mm... ムズカシイ言葉ばかりで、よく分かりませんデス...。」

たんの先生「分かりやすいように、表を用意しておいたんだ。下の表は、3つの分類における5つのポイントの具体例を挙げたもの。と言っても、学校教育は更に大学での教育を別個にしたから、分類は4つだけだね。」

	家庭	学校	大学	社会
制度・思想	母子関係論	学校制度	大学改革	生涯教育
方法	しつけ、おふくろの味	教育方法	大学での教授方法	成人教育法、企業内教育
心理	幼児心理学	学習心理学	キャンパス・カンセリング	生涯発達の心理学
評価	幼児の発達の評価	学力評価	大学入試	職業適性の評価
病理	母子分離、早教育	いじめ、非行、不登校	入試の過競争	学歴主義

キョウコさん「何となく少し分かったような気がします。」

ロンちゃん「でも、やっぱりまだムズカシイデス...。」

たんの先生「大丈夫、これからの授業で詳しく説明するからね。ちなみに、網掛けになっている3つは現在の教育学の中心となっていることなんだよ。」

イクオ君「先生、ひとつ気になることがあるんですけど...。」

たんの先生「何だい、イクオ君?」

イクオ君「家庭の方法の欄にある、『しつけ、おふくろの味』っていうのは、どういう意味なんですか。」

たんの先生「そうだね、今親が子にする“しつけ”というものは、過剰になりすぎて“おしつけ”になりつつあるよね。一方で、母親は料理に手をかけなくなって、袋から出してレンジで温めるなどするだけのレトルト食品がよく用いられていて、“おふくろの味”がいわば“ふくろの味”になってしまっている。“おふくろの味”から取れた“お”の字が“しつけ”にくっついて、“おしつけ”になっているんだよ。」

キョウコさん「わあ、上手いことおっしゃいますね。」

たんの先生「教育学の教授はダジャレ好きが多いんだよ。」

第 2 回 (4 月 26 日) —学校教育の病理—

たんの先生「突然だけど、問題。最近の中学校において、< a. 校則強化 b. いじめ c. 対教師暴力 > の 3 つが、どのように関係していると思う？図を描いて説明してごらん。」

キョウコさん「私は、厳しい校則に対して生徒の不満が募って、教師の目につかないところでいじめがおこり、教師の目に触れるように暴力が振るわれる。そうするとそれらを押さえ込もうとして更に校則が強化され、またいじめと暴力がおこり…というふうな悪循環が生じるんだと思います。いわば、校則強化こそが悪の根源という感じですね。」

イクオ君「僕はまず、高校受験に対するストレスがあると思います。で、その憂さを晴らすためにいじめがおき、それがエスカレートして対教師暴力になって、暴力を押さえるために校則が強化されるんだと思います。」

ロンちゃん「ワタシは、学校の外での生徒の非行が学校の中にも広がって、先生への暴力があるんだと思います。そこで暴力をやめさせるために校則を強めると、表面上は沈静化するけど、陰でのいじめにつながります。かといって校則を弱めると、マタ先生への暴力が起こるデス。先生はそういうディレンマ、板挟みの状態にあるんだと思います。」

たんの先生「なるほど。3 人ともよく考えているね。実はこの問題は、或る大学の教育学部の学生に聞いたものなんだ。その時もこの 3 つの説が挙げられて、少し “板挟み説” が多かったけどだいたい同数くらいだったんだ。」

キョウコさん「ということは、正解は “板挟み説” なんですか？」

たんの先生「いや、どれが正解、ということは一概には言えないよ。でも歴史的に見ると、確かに “板挟み説” で説明できるケースが最も多いんだ。勿論、“悪循環説” や “エスカレート説” であるケースも少なくないと思うけどね。」

ロンちゃん「歴史的に、と言われテモ、ワタシ達はそういう歴史よく知らないデス。」

たんの先生「そうだね、じゃあ、1960 年代から 2005 年までの学校教育の病理に関する歴史を、ざっと辿ってみよう。10 年刻みの各年代を、更に 3 つに区分して説明するからね。」

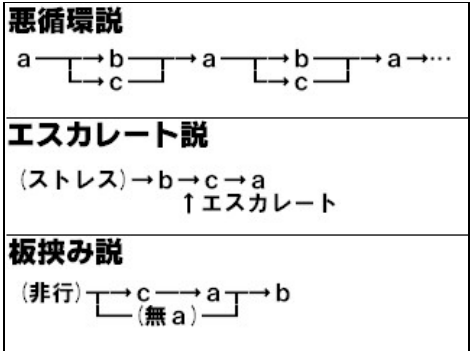


図 1 学校教育の病理

1960 年代中	①非行の第 2 ピーク	後	⑧管理過剰＋登校拒否
後	②大学紛争	1990 年代前	⑨先輩後輩関係＋オカルトブーム
1970 年代前	③シラケ＋内ゲバ＋暴走族	中	⑩新々宗教事件＋いじめの第 2 ピーク＋性非行
中	④乱塾＋落ちこぼれ	後	⑪校内暴力＋学級崩壊
後	⑤非行＋家庭内暴力	2000 年代前	⑫軋る＋児童虐待＋スクールカウンセラー
1980 年代前	⑥非行＋校内暴力	2005 年	⑬学力低下
中	⑦いじめ＋子どもの自殺＋偏差値体制		

図 2 学校教育の病理に関する歴史

- ①たんの先生「東京五輪の頃、非行の第 2 ピークがあったんだ。未成年による犯罪の例として、俳優の高島忠夫氏の長男が当時 17 歳のお手伝いの女性に殺害された事件 (1964 年) とか、社会党委員長の浅沼稻次郎氏が当時 17 歳の右翼の青年に殺害された事件 (1960 年) などがある。まあ、これらは学校とはあまり関係しなかったけどね。」
- ②たんの先生「1968 年から 1969 年にかけて、大学紛争が盛り上がったんだ。東大の安田講堂での学生運動は有名だね。あまりの混乱振りに、1969 年度の東大の入試は実施されず、その年の入学生は居なかったんだ。」
- ③たんの先生「大学紛争が収まってくると、学生は一気に沈静化して、シラケとかアパシー (無関心の意) とか呼ばれるようになった。でも一方で内ゲバ (ゲバとはドイツ語で “暴力” を意味する “ゲバルト” の意) と呼ば

れる過激派も登場して、最近映画にもなった浅間山荘事件(1972年)などが起こったんだ。そうそう、**暴走族**が出てきたのもこの頃だね。ちなみに東大の丹野教授が東大に入ったのは1973年だそうだよ。」

- ④たんの先生「この頃は受験フィーバーで、あちこちに学習塾が出来て**乱塾**と呼ばれる状態になったんだ。サンデー毎日が高校別の大学合格者数リストを発表し始めたのもこの頃。その一方で勉強についていけなくなった生徒は“**落ちこぼれ**”と呼ばれて、高校で7割、中学校で5割、小学校で3割がそれに該当したことから“**落ちこぼれの七五三教育**”なんて皮肉られたこともあるんだよ。」
- ⑤たんの先生「この頃、ツッパリとかヤンキーとかって呼ばれる**非行**学生が増えて、**家庭内暴力**も頻発したんだ。映画化もされた開成高校生絞殺事件(1977年)は家庭内暴力を振るう高校生を父親が殺害してしまうという事件だし、金属バット事件(1980年)も学生が両親を撲殺してしまうという事件だったんだ。」
- ⑥たんの先生「この頃も横浜市野宿者連続差別虐殺事件(1983年)に代表されるように**非行**が続発したんだけど、暴力が更にエスカレートして、**学校内**でも事件が起きるようになる。東京・町田の忠生中学校事件(1983年)では暴力を振るった生徒が教師に刺されるなど、かなり荒れた時代だったと言えるね。」
- ⑦たんの先生「ようやく非行は減ったけど、今度は“いじめ”という語が一般化するぐらいいじめが流行り、**子どもの自殺**も相次いだんだ。今でも演劇化される中野富士見中学校事件(1986年)が起きたり、歌手の岡田有希子の飛び降り自殺(1986年)を受けた後追い自殺が連鎖的に発生したりした。一方、1979年に始まった大学入試共通一次試験以来、大学入試が社会の関心事になって、大学だけでなく生徒にまで偏差値をつけるとい**偏差値体制**が一般化したのもこの頃だね。」
- ⑧たんの先生「非行やいじめを抑えるために、学校の生徒管理が過剰になってきたんだ。岐陽高校体罰死事件(1985年)、校門圧死事件(1990年)など、**体罰**や**管理過剰**が社会問題化した事例も多い。そうして窮屈になった学校に対して**登校拒否**(当時は不登校とは言わなかった)をする生徒も増えたんだ。」
- ⑨たんの先生「非行やいじめが抑え込まれて、校内には一応の平和が訪れた。問題といえば、異常なまでの**先輩・後輩関係の強化**があったり、UF0や超能力といった**オカルトブーム**が隆盛したり、連続幼女誘拐殺人事件(1988年)以降マイナスイメージとしての“**オタク**”という言葉の流行があったりした程度かな。」
- ⑩たんの先生「この頃は地下鉄サリン事件(1995年)などの**新々宗教事件**とか、援助交際などの**性非行**とかが問題視されていたんだ。だからマスコミでは余り取り上げられなかったけど、**いじめの第2のピーク**があったのもこの頃で、大河内事件(1995年)などの自殺事件も起こったんだよ。」
- ⑪たんの先生「**校内暴力**が増加して、バタフライナイフなどを携帯する生徒が増えたのがこの頃。それに、それまでも中学校や高校などで見られていた**学級崩壊**が低年齢化して、授業中に歩き回る小学生が出てきたりとか、自殺予告をほのめかして運動会などを中止させる電話が相次いだりとかして社会問題になったんだ。」
- ⑫たんの先生「この頃、“**キレる**”という言葉が一般化するくらい校内暴力が横行して、**スクールカウンセラー**が設置されることも多かったんだ。一方で家庭では、**児童虐待**で子どもが亡くなってしまうという事件が多発したんだよ。」
- ⑬たんの先生「そして今の学校教育では、“**ゆとり教育**”の方針に基づく学習指導要領の改訂によって、**子どもの学力低下**が懸念されているんだ。」

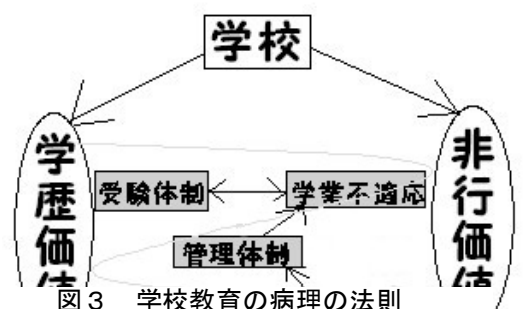
※各項目の具体例は、授業中に丹野教官が挙げたものを、ネット検索による裏づけ・名称変更を加えて載せているものです。

イクオ君「こうしてみると、各時代において様々な事件があるんですね。」

たんの先生「そうだね、でも、大きな視野でとらえると、ある法則が浮かび上がるんだ。」

キョウコさん「法則?」

たんの先生「まず、学校に対して人々が感じている価値には2つのベクトルがあるんだ。というか、2つの価値に分解しつつあると言



ってもいい。1つは学校を学力をつけるための場であると考え、良い学校を出ることで学歴という利益を得たいと考える“**学歴価値**”。もう1つは校則に拘束されることをも疎み、今が楽しければいいと感じて非行にも走るという“**非行価値**”だ。例えば、70年代の乱塾とか、勉強についていけないことなどに起因する家庭内暴力とかいう、“**受験体制**”にまつわる問題が生じるのは、人々が“学歴価値”を強く意識している時期だったからだし、同時期に落ちこぼれ呼ばわりされる生徒が増えたりとか非行・校内暴力が横行したりとかした、いわば“**学業不適応**”にまつわる問題が生じるのは、特に生徒が“非行価値”を強く求めていたからだ。そうした非行を抑えようとして、80年代の管理過剰問題やいじめ・不登校問題といった“**管理体制**”にまつわる問題が生じたんだけど、その体制が余りにきついからということで“**ゆとり教育**”の考え方が生まれたんだ。

キョウコさん「それじゃあ、“ゆとり教育”というのは元々、“ゆとりある勉強”という意味よりも“**管理に対するゆとり**”というニュアンスだった、ということですか。」

たんの先生「そういうことだね。でも、この“ゆとり教育”に対して“**学力低下**”を懸念する声が出てきた。これは社会が“学歴価値”を求めるようになったからと考えられるんだ。」

ロンちゃん「Mm,,まるで人々の関心がフリコみたいに左右にふれている感じがします。」

たんの先生「まさにそういう感じだね。学歴価値(受験体制)の方に関心が傾きすぎると何らかの問題が生じて反動が起こり、非行価値(学業不適応)の方でも同様なことが起こる。そしてその二つの中間に管理体制が存在するんだ。受験体制と学業不適応、そして管理体制の三極に分解している学校に対して、社会の要求は学歴価値と非行価値の2つの価値の間を揺れ動いているんだよ。これは日本に限らずアメリカなどでも同じようなことが起こっているし、今後もきっとこうなっていくと思うよ。」

イクオ君「これがさっき先生がおっしゃった法則なんですね。」

たんの先生「そういうこと。それじゃあ、今回はこの中でも特に“**校内暴力**”について考察してみよう。」

第3回(5月10日) ―校内暴力―

イクオくん「♪行儀よくまじめなんて 出来やしなかった 夜の校舎 窓ガラス壊してまわった〜♪」

キョウコさん「…突然えらい過激な歌を歌ってるわね、イクオくん…。時期も全然違うのに。」

ロンちゃん「Mm... イクオサン、キョウコサン、今の歌は何という歌なのデスカ?」

イクオくん「ああ、これは尾崎 豊の『卒業』(1985年発売)という歌だよ。いやー、カッコいいなあ、尾崎 豊。」

キョウコさん「いや、だから、何でこんな暑い時期に卒業ソングなのよ。」

たんの先生「まあまあ、いいじゃないか。今日の講義にちょっと関係する歌なんだし。」

イクオくん「あ、たんの先生。おはようございます。って、講義に関係あるんですか。」

たんの先生「ああ。今日のテーマは校内暴力だからね。」

たんの先生「校内暴力の現象としては、幾つか段階があるんだ。まず窓ガラスなどが壊されるなどの(1)器物破損、それがエスカレートするといじめやケンカといった(2)生徒間暴力、そしてもっとエスカレートすると(3)対教師暴力へとになっていくんだ。あともう一つ、教師の側からの校内暴力としての体罰もあるけど、それは別の機会に取り上げることにするね。さて、此处でこのグラフを見て欲しいんだけど。」

ロンちゃん「コレは何のグラフですか?」

たんの先生「これは、文部科学省の調べによる対教師暴力の発生件数のグラフだよ。」

イクオくん「なんか、1980年頃から一気に件数が急増しているんですね。」

たんの先生「そうだね。1970年代までは比較的學校は平和だと言われていたけど、特に1983年をピークに急増し、1985年には青森県で中学3年生が教師を殺害する事件が起こったんだ。対教師暴力で教師が死亡したのはこれが最初で、以後もずっと割と高いところを推移しているよね。」

1998年にも栃木県黒磯市の中学校で女性教諭が刺殺される事件もあったし。」

キョウコさん「そう言えば、校内暴力ってやたらと中学校で多いような気がするんですけど…。」

たんの先生「いいところに気がついたね。それじゃあ今回は、1980年以降何故校内暴力が非連続的急増を見せているのか、そして何故その多くが(特に公立の)中学校で起こるのかを見ていこう。」

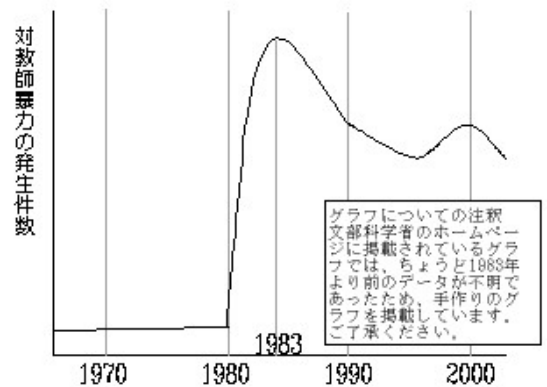


図4 対教師暴力の発生件数

たんの先生「まずは、校内暴力がエスカレートしていくその経過を見ていこう。これは何処でも似たような経路を辿るんだ。」

(1)器物破損(School Vandalism/Vandalismとは芸術・文化を破壊する行為のこと)については、ゴミの放置などから始まり、ついでロッカーやトイレなどの比較的軽微な破損や割と政治的な落書きが起こる。そして窓ガラスへの投石や消火器のイタズラ、ひいては放火にまで至る破壊へとになっていくんだ。」

キョウコさん「それじゃあ、さっきイクオくんが歌っていた歌もその破壊に分類されるわけですね。」

たんの先生「そうだね。まあでも、これらは人に危害が及ばないだけまだマシなんだけど、大抵これらの経過と同時に次の(2)生徒間暴力も水面下で進行しているんだよ。まず、ゲームセンターや盛り場などでいわゆる“ヤンキー”など校外非行集団と接触するんだけど、これによって恐喝されて金品を強要されたり、文化祭などのイベントの日にそういう集団が校内に侵入して学校が遊び場化したりしたんだ。この時点で非行性の生徒はまだ被害者なんだけど、こういう抗争のうちに、抵抗するため生徒自身が非行集団を結成するようになる。とは言え、1970年代にはまだ授業を妨害するなど校内での非行は余り無かったんだ。でも、非

行集団に入ると優越感を得たりいじめを回避できたりする、という**魅力**を非行集団が帯びてくると、その活動は校内にも及び、真面目で優秀な“**正常集団**”に対して“教師の側につくブリッコだ”とか“正義はカッコ悪いものだ”とか**中傷**したり、1980年代には暴力の誇示として**弱い者いじめ**に発展したりするようになったんだ。」

イクオくん「そういう事態に対して、学校側はどんな対策をとっていたんですか。」

たんの先生「そうだね、流石にこの状況を放っておくと弱肉強食状態になってしまうから、教師はリーダー格の生徒を設定したり班を作ったり、非行集団による派閥などが出来ないように取り計らったりしたんだ。でも非行が進むと、そういう生徒はカッコ悪いと感じられて孤立し、さらに非行に対して見て見ぬフリをする**中間層の迎合**があったりして、余り効果はなかったんだ。生徒全体の5%が非行グループになると、どうしようもなくなると言われているしね。しかも、暴力を受けている生徒が更に他の生徒を使い走りにしたり万引きさせたりするという“**被害者の加害者化**”とも言うべき状況も発生したんだ。生徒間の関係が変わって、いじめを止める存在がなくなってしまったんだね。」

ロンちゃん「何だか、そういう生徒が一番カワイソウだと思imasu…。」

たんの先生「うん、実際こういう生徒が自殺したり事件を起こしたりしたから、今にして思えばこういう生徒を救うべきだったんだよね。更に生徒は**脱落防止策**として、髪型や服装を変えてみたりしたんだ。古くから“服装の乱れは心の乱れ”なんて言うけど、それがよく当てはまる感じがするよね。

さて、次に(3)対教師暴力の経過を見ていこうと思ったんだけど、そこからはまた次回。」

第4回(5月17日) —校内暴力2— ※一部第3回、第5回の授業内容を含みます

たんの先生「それじゃあ今日は前回の続きで、まず(3)対教師暴力の経過から見ていくよ。

前回見たような校内暴力に対する歯止めが利かなくなってくると、**教師に対する挑発**とか**規則への段階的な違反**が出てくるようになる。更には、非行に対する罰の与え方など、教師間の足並みの乱れを逆手にとって、そうした違反を**合理化**する者も出てきたんだ。」

イクオくん「厳しい先生の前では大人しくしておいて、厳しくない先生の前で非行に走る、という感じですか。」

たんの先生「そういうところだね。そして、それが**公然化**すると**対教師暴力**に発展するんだ。最初は騒いでみせたりラジカセを鳴らしたりして**授業妨害**をする。時には授業そのものが成立しなくなるようなケースもあって、この流れは“**学級崩壊**”として小学校にまで広がっているのはみんなの知る通り。

それがエスカレートすると、ついカットとなって教師に暴力を加える**衝動的対教師暴力**となり、**教師に対する挑発**にもなったんだ。弱かったり余り叱らないような先生に対して、教科書を燃やすなどのいやがらせをしたんだね。あ、一度私もこの場で教科書燃やしてみようかなあ」

キョウコさん「…絶対やめてください；」 (注)↑この発言は授業中の丹野教官の発言を余り改変せず載せたものです(笑)。

たんの先生「冗談だよ、冗談。で、最後には**計画的な対教師暴力**へと発展するんだ。」

ロンちゃん「ケイカクテキ?どういうことデスカ?」

たんの先生「あらかじめ生徒間で『今日〇〇先生をいじめようぜ』などと打ち合わせしておき、その教師を挑発して教師の注意や体罰を誘うんだ。それをきっかけに複数の生徒でその教師に暴力をふるう。教師の側にも他の教師がやってきたりもするんだけど、教師より生徒の方が人数は多いから、多勢に無勢という感じで教師が負けてしまう。しまいには警察沙汰になってしまうこともあったんだ。退職したり病気になったり、遂には自殺してしまったりする教師も少なくなかったんだよ。」

キョウコさん「それじゃあ、先生っていうのは命がけの職業だったんですね。」

たんの先生「それじゃあ此処からは、そういった校内暴力の**原因と対策**を考えてみよう。まずはこの表を見てごらん。」

イクオくん「何ですか、この表。」

たんの先生「ええとね、校内暴力の原因は大まかに分けると、非行に対

	外的要因	内的要因
誘因の増加 ↑	①	②
抑止力の低下 ↓	③	④

する**誘因が増加**したことで、非行に対する**抑止力が低下**してはどめが利かなくなったことの二つになる。」

キョウコさん「言わば、アクセルが強くなる一方でブレーキが利かなくなった、ということですね。」

たんの先生「そう。だから対策としては、アクセルを弱めてブレーキを強めるようにすればよい、ということになるね。

そしてそれらの原因は環境など**外的なもの**と気持ちなど**内的なもの**にも分けられる。此処ではそれらの原因を、この表のように分類して説明していくね。」

①外的な誘因の増加

たんの先生「中学校の番長グループとかの非行少年は、**暴走族**とか**地域の非行のOB**などに対して、**人員や上納金を提供**すると共に(ここにはしばしば脅迫が行われたりもするけど)、他の中学校と対立したり教師に逆らったりする時に必要な**力の享受**



図5 校内暴力の外的誘因

や方法の指導などが行われたりするんだ。ちなみにこうした学校と暴走族との関係は、実は暴走族と暴力団との関係にもなっていて、例えば暴走族に居られるのは3年くらいであり18歳になって単車に乗るのはカッコ悪いこととされたから、18歳になったら足を洗うか暴力団に加わるかどちらかだったそうだよ。」

イクオくん「なんか、日本の教育の6・3・3・4制みたいですね。」

たんの先生「だから、学校が荒れた理由としては、暴走族に対する取締りが強くなったために暴走族の**資金を学校の非行少年たちに求めたこと**や、**非行少年自身もすすんで暴走族に入るようになったこと**などが挙げられるんだ。教師は生徒が荒れるのを止めようとするけど、そこで暴走族は非行少年に教師への抗い方を伝授するから、いたちごっこになってしまうんだね。」

ロンちゃん「Mm... それでは、どのようなタイサクが取られたのデスカ?」

たんの先生「1つには、学校と暴走族との接触を地域のPTAなどを通じて断つということ。例えば、(免許を)とらない、(単車を)買わない、乗らない、という“オートバイの3ない運動”なんてものも出来たくらいなんだ。2つには、番長集団そのものの解体だ。でも、この2つはなかなか上手くいかず、高校には“退学11万時代”が訪れたりもしたんだよ。3つ目は、そういった集団の**引き継ぎを阻止**すること。学校は学年ごとに入り口を変えたり、教室を学年ごとに縦割りにしたりするという、**学年隔離政策**をとったんだ。」

②内的誘因の増加

イクオくん「非行少年の内的な、つまり気持ち的な誘因ということは…**学校への不満**とかですか。」

たんの先生「よく分かったねイクオくん。その不満の理由としては3つある。1つは**学業不振**。非行によって補導された少年の8割近くは学力が下位で、教師に対して恨みを持っていたんだね。といっても彼らは頭が悪いというよりも、学習意欲が低いという方が正しかったようだけだね。2つ目は**自己評価の低さ**。自分はダメな奴なんだ、と公言してしまうくらい自分を卑下してしまうために非行に走るというわけだ。そして3つ目は**将来への展望の喪失**。中には30歳くらいまで生きてあとは死んでもいいやとすら思う生徒も居たそう。だからどうなってもいいやという気持ちから非行を起こすということだね。」

キョウコさん「なるほど。それじゃあ、それらへの対策としてはどのようなものがあるんですか。」

たんの先生「学業不振に対しては『**分かる授業**』をスローガンとして、学習内容を減らすなどの対策が取られたけど、これはちょっと効果薄だったかも知れないね。自己評価の低さに対しては、一人ひとりの長所を引き出すなどして**肯定的自己像を育成**しようとしたんだ。将来への展望の喪失に対しては、進学指導よりももっと先の将来を見据えた『**進路指導**』を行ったり、**教育カウンセリング**を実施したりしたんだ。」

イクオくん「今の“ゆとり教育”にもつながっている感じがしますね。」

③外的抑止力の低下

ロンちゃん「ガイテキヨクシリョク、というのは、そもそもどんなモノのことデスカ?」

たんの先生「そうだね、端的に言うとも**学校と家庭**の2つだね。でも、学校の持つ抑止力というのは**ことばや教育による間接的な抑止力**だけ。暴力を直接抑止できるのは警察だけだからね。でもそのことば等も上手く働かなくなってしまったんだ。一方家庭の持つ抑止力というのも、“しつけ”という**間接的な抑止力**だけなんだけど、調査の結果子供に対して**放任主義**を取っている親が全体の70%近くを占めるようになったから、この効果も余り期待できなくなってしまったんだ。」

キョウコさん「確かに私のママも、私の夜遊びも兄の家出もパパの浮気も放任してしまってるのよねー…。」

イクオくん「それって今の話題と無関係のような…っていうかどんな家庭だよそれ」

たんの先生「まあまあ、話を戻すよ。これらへの対策としては、1つに**非行の手口や対応の研究**があって、**静止の言葉や役割分担**などの指導マニュアルを作成したりしたんだ。2つ目はとにかく**毅然とした態度を取る**ってことだね。教師間の対応の差をなくし、悪いことは悪いと足並みを揃えて言えるようにする。ちなみに此処で**体罰**を行使することは、先述の“教師に対する挑発”のように逆効果になり得るんだ。3つ目は**学校と家庭との連携を強化**すること。そして4つ目は**非行の早期発見と早期指導**を目指すことだ。」

ロンちゃん「何か、病気の予防みたいデス…。」

たんの先生「但し、こういう動きが過剰になると“**管理教育**”という別の問題が生じてしまうから、難しいところでもあるんだ。」

④内的抑止力の低下

キョウコさん「それじゃあ、内的抑止力というのは具体的にどういうものなんですか。」

たんの先生「**非行に対する内なる歯止め**、つまりは**規範意識**とか、**道徳意識**といったものだね。こういったものが、他人のことを思いやれなかったり様々なことに我慢できなかったりする**自己中心性**とか、**歪んだ目立ちたがりの気持ち**などから生まれる**自己顕示欲**によって低下してしまうんだ。」

ロンちゃん「それらにはどうやって対処すればよいのデスカ?」

たんの先生「実際にある例だと、学校で**暴力否定宣言**を出してみたり、**民主的な生徒会を運営**させてみたり、あるいは**部活動を活性化**させてみたりするんだ。そうやって生徒の意識を改革させるよう試みるというわけだね。」

イクオくん「確かにうちの高校は部活必修でしたね。僕は陸上スキー部とアマチュア糸電話部とルーズリーフ部とケニア音楽愛好部とアンチ携帯電話部を掛け持ちしてましたけど。」

キョウコさん「ちょっと待って、それ一つ一つどんな部なのよ?」

たんの先生「まあまあ。あと対策としては、**非行少年の多くは大勢の中だと威張るけど1対1で話をする**と案外素直になるという心理を利用して、教師と生徒の1対1で**個人指導**をするというのも有効なんだ。」

キョウコさん「なるほど、結構教師の側も生徒の心理とかを考えて対応しているのですね。」

たんの先生「そうだね。さて、今回は**体罰と管理教育**について見ていくことにしよう。」

第5回 (5月24日) —体罰—

たんの先生「さて、君たちは**体罰**はやっても仕方がないと思うかい？それとも、何があってもやってはいけないと思うかい？」

ロンちゃん「ヒトがヒトを傷つけることはイケナイことデス、絶対ダメだと思います。」

キョウコさん「そうですね、話し合いで解決できる範囲ではそうすべきですね。」

イクオくん「でも、非行に走る生徒って教師の言葉にそうやすやすと耳を傾けるような気がしないから、体罰は場合によってはアリなんじゃないかなあ。」

たんの先生「なるほど。君たちの中でも意見が分かれたけれど、一般的に見てもやっぱり此処は意見が分かれるところなんだ。それでは、**体罰を禁止する側と許容する側の意見**を、形式的・古典的な立場と現代的・現場的な立場からそれぞれ見ていこう。」

	禁止論	許容論
形式的	①	②
現場的	④	③

①形式的禁止論

たんの先生「まず、**学校教育法の第11条**にこんな条文があるんだ。“校長及び教員は、教育上必要があると認めるときは、文部科学大臣の定めるところにより、学生、生徒及び児童に懲戒を加えることができる。ただし、体罰を加えることはできない。”とね。」

キョウコさん「それじゃあ、そもそも体罰は犯罪ということじゃないですか。」

たんの先生「そういうことになるね。それに**生徒の人権を侵害**しているのではないか、という声もある。茨城大学の調査によると、これまで体罰を何回受けたことがあるか、という質問に対する回答で、1人あたりの平均は23回だったそうで、その中で体罰を受けたことを納得していないという人が64%、その先生を否定しているという人が41%居るんだそうだよ。ちなみに私は100回以上だったけど。」

イクオくん「い、意外に先生ってやんちゃ坊主だったんですね…」

たんの先生「それから、体罰は**ただの暴行に過ぎない**という意見もあるんだ。中には非道な技を考案し実施する先生も居るというしね。」

②形式的許容論

たんの先生「しかしその一方で、体罰は“**愛のムチ**”であるとして許容する論も少なくないんだ。体罰事件が裁判で無罪になることもあるし、体罰を奨励するような団体だってある。しつけの延長線上として、家庭だけでは足りないしつけを学校に委任しているのだから、**親の代わりに体罰をするのも許される**という意見もあるんだ。」

ロンちゃん「そう言えば、アメリカの一部の州やイギリスなどでは、キリスト教の性悪説に基づいて限定的に体罰を容認スルところがあると聞いたコトがあるデス。」

たんの先生「うん、もちろんそれらの場合でも体罰の方法や身体箇所など、制限があるんだけどね。」

③現場的許容論

たんの先生「現実的な許容論としてはやはり、**非行や授業崩壊への対策**が一番に挙げられるだろうね。重度のものでは**対教師暴力への正当防衛**とか、生徒間暴力やいじめの制止などがあるし、規則違反や授業不成立(ここでは遅刻やおしゃべり、忘れ物などの軽微なもの)に対しても行われる。かつてNHKが教師に対して実施したアンケートによれば、体罰をしたことがあると回答した教師は62%だったそうだよ。」

イクオくん「やっぱり現実問題としては仕方がないんでしょうか。」

たんの先生「でも、体罰によって**対教師暴力や非行などが制止されたとしても、いじめや弱い教師への反抗といった副作用**が生じる可能性があるから、やっぱり**体罰によらない非行対策が必要**ではあるんだ。」

④現場的禁止論

キョウコさん「それでは、具体的にどのような非行対策がとられているんですか？」

たんの先生「まず一つには、**倫理的な要求**を生徒にすることだね。**能重真作**(のうじゅう・しんさく)という人の『ブリキの勲章』(民衆社、2002年)という本では、体罰でもなく放任でもない、**毅然とした態度**で生徒に“悪いことは悪い”と教えたという彼の体験が記されているんだ。また、“**わかる授業**”に取り組もうとする教師も多く、**池上正道**(いけがみ・まさみち)という人は『非暴力宣言』(出版社等不明)で、学級通信を頻繁に作成するなどしたことを記しているんだ。」

キョウコさん「確かに、そういう先生が居ると非行も減りそうですね。」

たんの先生「教師の側も、好きで体罰をしているわけじゃないからね。色んな試みで非行を減らし、体罰を減らす努力が必要なんだよ。」

第 6 回 (5 月 31 日) ―いじめ―

たんの先生「今日はいじめをテーマに取り上げるよ。ちなみにいじめというのは**教育社会学**の分野でもあるという観点も踏まえた上で行くからね。順序としては、統計・経過・原因・対策という感じで進めていくよ。」

①統計 ※文中並びにグラフ中の数値は丹野教官が言ったとおりを書いています。

たんの先生「まずは右の図を見て。これは中学生全体の中でどのようないじめがどれくらいあるかを調べたものなんだ。普通マスコミなんかで取り上げられるようないじめっていうのは、警察沙汰になって生徒が**補導**されるような部類だと思うんだけど、そういったものは約 500 万人の中学生に対して約 1500 人、大体 0.04% くらいしか居ないんだ。」

イクオくん「まさに氷山の一角という感じですね。」

ロンちゃん「ゾウサンノシッカク…?」

キョウコさん「本当はもっと多いけど、表に出ているのはそのうちのごく僅かだって意味だよ。」

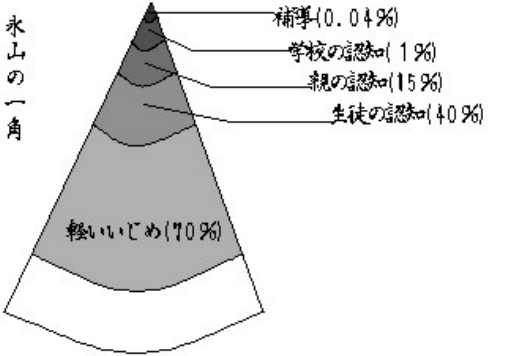


図 6 いじめの統計

たんの先生「次に、学校が認知していて文部科学省などへ報告しているのは約 5 万件、全体の 1% 程度なんだ。親が“自分の子供がいじめられている or いじめている”と認知しているのは約 15%、生徒自身が“自分はいじめられている or いじめている”と認知しているのは約 40%。持ち物を隠すなどの軽いいじめまで考慮すると、実に約 70% にまで達するんだ。」

キョウコさん「それだけいじめというものが一般化している、ということですね。」

たんの先生「そうだね。ちなみに東京大学の生徒に対していじめの経験があるかということをか

つてアンケート調査した際には、62% の生徒が経験があると回答したんだ。いじめを受けた (被害) 経験といじめをした (加害) 経験とに分けて集計すると右の表のようになったんだ。いじめの内容としては、仲間はずれにするとかいうことから、叩いたりつねったり着ているものを脱がせたりするようなものまで様々なにあったそうだよ。そして、この**加害経験の有無というものが実はいじめに対しての価値観を左右するんだ**。加害経験のある人はいじめを面白いものだななどと感じて肯定するが、経験がない人は真っ向から否定するという感じにね。」

数値は%		加害	
		有	無
被害	有	23	19
	無	19	38

②経過

イクオくん「それじゃあ、どのようにしていじめって起こるものなんですか?」

たんの先生「うん、じゃあその経過を見ていこうか。まず最初は生徒どうしが互いにかかったり囃(はや)しあったりするという“**翰(さや)当て段階**”がある。この時点では生徒に悪意はないんだけど、この段階を通して或る程度“いじめに弱い子”が浮かび上がってきて、いじめのターゲットが見つかるというわけだ。」

キョウコさん「いじめられたくない子にとってはいわば正念場という感じなんですね。」

たんの先生「次の段階は“**流動化の段階**”。さっきよりちょっと悪意が出てきて、各自がいじめもするしいじめられもするというふうに立場がごちゃまぜになっている段階だ。でも次第に集団の力学とでもいうべき原理でその立場が定まってくると、今度は“**固定化の段階**”になり、手段もどんどん悪質になっていくんだ。い

数値は%	加害者	被害・加害者	被害者	仲介者	観衆	傍観者
小学校	19	20	16	7	6	33
中学校	20	8	9	4	16	44

じめの問題についてデータの集計をもとに考察

している**森田洋司**(もりた・ようじ)という人によると、小学校と中学校でのいじめにおける人数比は左の表のようになるそう。ちなみに「被害・加害者」は被害者でもあり加害者でもあるという人、「仲介者」はい

じめを制止しようとする人、「観衆」はいじめを面白がって見てあおったりする人、「傍観者」はただ知らんふりをするだけの人。これを見ると、例えば小学校から中学校になるにつれて「被害・加害者」や「被害者」が減少していることから、中学校でだいぶ固定化が進んでいる、つまりいじめが深刻化しているということが分かるよね。」

ロンちゃん「イジメは中学校で一番多いのデスカ？」

たんの先生「そうだね。そういう点では、校内暴力や体罰とも通じるものがあるんだろうね。ところで、ただの“弱い者いじめ”なら昔からあるにはあったんだけど、現代のいじめには一つの特徴があるんだ。それは、“みんなが同じようにしなければいけない”というような**集団への画一化の圧力**によって、目立っている子がいじめられる傾向にあるということ。それに呼応して、真面目だとか教師の側につくとかいうことに悪いイメージがつき、“**レッテルの拡大**”という事態が生じたんだよ。ちなみに、いじめられる子の中で成績が良い生徒は22%、成績が悪い生徒は46%だから、成績の良し悪しがいじめられるかどうかには必ずしも関係するとは限らないんだ。」

イクオくん「ということは、**転校生**がいじめられることがあるというのもその画一化が関係しているんですか？」

たんの先生「そうえるね。ちなみにイギリスなどではいじめた子を転校させることでいじめを解決させるんだけど、日本では逆に先生の危惧によっていじめられた子が転校してしまうので、転校がいじめの解決になっていないというのが現状なんだ。

さて、そのような固定化が進むと、今度は**手口の陰湿化**が起こるんだ。いじめに何らかの口実をつけて正当化してみたり、テレビCMなんかを模倣して粗暴化したりと、どんどん狡猾(こうかつ)になっていき、ついには**犯罪**にまで発展することもあるんだ。」

キョウコさん「犯罪化、ですか？」

たんの先生「そう、いじめが**非行化**してくると、例えば金を強奪したり、性的屈辱を与えたりするようになり、生徒の**自殺**にまでつながるんだ。1986年の中野富士見中学校事件で当時中学2年生の男子生徒が首吊り自殺をしたのが最初の自殺事件で、以後続出したというのは第2回の授業でも触れたよね。」

イクオくん「なんか残酷な話ですよ。どうにかしていじめを減らす手立てはないんですか？」

たんの先生「それは次の“原因と対策”で詳しく見ていこう。」

③原因

たんの先生「いじめの原因と対策については、右の表を使って解説していくね。」

	外的要因	内的要因
誘因の増加 ↑	i	ii
抑止力の低下 ↓	iii	iv

ロンちゃん「Oh, この表はどこかで見たコトがありマス。」

キョウコさん「って、第4回の表とそっくりそのままじゃないですか。」

たんの先生「いやいや、中に入ってる数字の表記が違うんだよ。」

イクオくん「何でそんな中途半端な間違い探しやってるんですか。」

(i) 非行集団の影響

たんの先生「前に(第3回) **校内暴力**のところで、学校側が決めたリーダーが無視され非行集団が横行し、見て見ぬふりをする生徒も現れる、なんていう話をしたよね。さっき出てきた洋司さんの表なんかを見ると分かると思うけど、この構図って実はいじめの問題についても当てはまるんだ。**加害者(=非行集団)**が横行すると**仲裁者(=リーダー)**が黙殺され、見て見ぬふりをする**傍観者**も多く出てくる、というふうだね。」

イクオくん「ホントだ、じゃあやっぱり根本的にこれらの問題はつながっているものなんですね。」

たんの先生「ちなみに、さっきの中野富士見中学校事件でもそうだけど、いじめる側に居るとされている生徒が実は使い走りなどのいじめに遭っているという事態もあって、そういう生徒の自殺は結構多いんだよ。」

(ii) 生徒管理の行き過ぎ

たんの先生「さっきイクオくんが言ったことは、こっちでより鮮明になってくるんだ。つまり、**校内暴力**に対して学校側が校則を強めるなど**生徒管理を強めると、生徒の欲求不満**が募ってこれがいじめにつながるんだ。」

キョウコさん「管理教育というのは、目に見える校内暴力は失くせても、その力がいじめという形で水面下に残されているから、ちゃんとした解決には実はなっていないのかも知れませんね。」

(iii) 教師からの不可視性・仲裁者不足

たんの先生「外的抑止力の低下というのはつまり、**教師がいじめをそれと判別できなくなっている**ということだね。手口が巧妙になってうまい口実が用意されてたり、動機が不明瞭だったり、“チクリ”を恐れて教師に情報が届きにくくなったり、教師が多忙になったりとかしているから。それに、**同調行動**とか、みんなで同じ方向を向いてしまう集団無視とかのせいで、**仲裁者が減ってしまっている**のも大きな要因だね。」

イクオくん「**同調行動**って何ですか?」

たんの先生「アッシュ (Asch) という社会心理学者が提唱した理論で、人は文化や国籍に関係なく、多数決に従ったほうが良いと思ってしまう、というものだよ。彼の実験では、1人の被験者に質問をする前に4人のサクラに質問して同じ回答を言わせると、被験者はどう答えるか、というものがあり、約80%の被験者が自分の本来の意思に反して前の4人と同じ回答をしたんだそうだ。」

キョウコさん「あー、レストランに5人くらいで行って、私はステーキとカレーを頼みたかったのに、他の4人が温野菜サラダだけしか頼まなかったから、私もつられて同じのを頼んじゃった、っていうのと同じですね。」

ロンちゃん「キョウコサンって大食いなのデスネ…。」

(iv) 面白さの価値基準

たんの先生「先ほどの洋司さんの調べによれば、特に“**観衆**”層の生徒は、**いじめは悪いことだけど面白い**と感じていて、**まじめは良いことだけどつまらない**と感じているというんだ。1980年代中盤の漫才ブーム以来、生徒の間には面白いことを優先するという風潮が強まっているのかも知れないね。」

キョウコさん「でも、人をからかったりすることを面白がるなんて、私は嫌いですねー…。」

たんの先生「私も同感だよ。さて、今回はそうしたいじめへの対策と、それから**不登校**の問題について取り上げてみよう。」

第7回(6月7日) ―いじめ(続き)と不登校―

たんの先生「前回いじめを取り上げた時、冒頭に提示した4つの手順の最後、**対策**だけをまだやっていなかったよね。」
イクオくん「そうですよ、あれだけ言っておいて対策だけ言わないなんて、気になって気になって夜も眠れなかったんですよ。」

ロンちゃん「Oh, だからイクオサン、さっきの授業の時もイネムリしてたんデスネ!」

たんの先生「というわけでまずは対策からだけど、この中もまた4つに分類して説明するよ。」

(i)いじめの発見

たんの先生「少し前までいじめを発見するためによく行われていた方法に、“**ソシオメトリックテスト**(Sociometric Test)” というのがあるんだ。」

イクオくん「そ、阻止乙女ちっくテスト…?」

キョウコさん「……」(無言でイクオくんハリセンチョップ)

たんの先生「例えば生徒達に、“この人と一緒に行動したい、という人を3人挙げてください”といったような質問をして、生徒同士の関係を把握するものなんだ。例えば今の質問の場合、誰からも選ばれなかったような人が居れば、その人が人間関係的に孤立している、つまりいじめられている可能性が高い、というわけだね。」

ロンちゃん「ナルホドー…でも、ソレってなんかいい気分がシマセン…」

たんの先生「そうなんだよ。このテストは倫理的に問題があると指摘を受けて、最近では余り行われてないんだ。」

(ii)いじめへの介入

たんの先生「この観点では、**ロールプレイ法**(役割演技、心理劇)という対策があるんだ。一例を挙げると、生徒一人ひとりに“仲間はずれ”をテーマに演劇のシナリオを創ってもらう。そしてそれを実際に生徒に演じてもらうんだけど、その際途中で演技を止めて、“もしここが(シナリオと違って)こんなふうだったらどうだと思う?”などと提案してシナリオと違う演技をさせてみたりするんだ。こうすることで、劇を通していじめの子やいじめられる子の心理を深く感じられるように促すってわけだね。」

キョウコさん「なるほど、それは素晴らしい方法ですね。私もそういう機会があったら、ついつい女優魂が燃え上がっちゃって役に入り込んでしまうそうですもん。」

イクオくん「…いつの間に女優になったんだ?」

(iii)いじめの予防(1)

たんの先生「まずは1939年にレヴィンという人が行った実験を紹介するね。彼は子供達を3つのグループにわけ、それぞれに1人ずつリーダーを置いた。1人は特になにもしない“**放任型**”のリーダー。1人は自分ひとりで何でも決めてしまう“**専制型**”のリーダー。そしてもう1人は討議や協議によって決定する“**民主型**”のリーダー。そしてそれらのグループに同じ仕事をさせてみたところ、“放任型”は仕事の結果が劣っていたけど他の2グループは結果の面ではそんなに変わりなかった。でも、“民主型”は各自が友好的であったのに対し“専制型”は雰囲気が悪く弱い者いじめまで起こったんだ。つまり、**専制型リーダーシップ**よりも**民主型リーダーシップ**の方が、生徒や教育者にとって良いということになるんだ。」

ロンちゃん「歴史上もそういう王サマは長続きしなかったみたいデスネ。」

(iv)いじめの予防(2)

たんの先生「もう1つの予防策として、“**異年齢集団**”をつくることが挙げられるね。」

イクオくん「異年齢集団って、異なった年齢による集団ってことですか?」

たんの先生「そう。学校の外の集団、例えば地域の集団とかだと、いろんな階層や年齢の人で成っているから強者と弱者の別がはっきりしていて、目上の人が目下の人を守ったりケンカの仲裁をしたりするでしょう。」

キョウコさん「確かにそうですけど、でも最近では地域とかでも同年齢による集団だったりして、強者と弱者の概念は余りはっきりしないと思うんですが…」

たんの先生「まあそうかも知れないけど、でも異年齢集団の方が良さそう、というのは変わらないよね。学校における異年齢集団ということはつまり、いわゆる“タテ割りのクラス編成”をしよう、ということになるんだ。小学校では学年を越えて一緒に遠足に行くなどしていわば“きょうだいづくり”をしたり、中学校では部活動を奨励したりするとかね。」

ロンちゃん「そう言えば前にも部活動のコト言ってマシタネ。」

たんの先生「まあ部活動が手放しに良いということもないんだけどね。非行集団の跡目相続などが行われてしまったりしかねないし。そういう面では学校は寧ろ学年隔離政策をとりがちなんだけどね。」

たんの先生「とまあ、色々あったけど、最近でこそいじめは表立たなくなった。けれど、まだまだ水面下でははびこっているのも事実なんだよね。」

たんの先生「さて、此处からは“不登校”の問題についてみていこう。不登校はいわば学校心理の問題だけど、これと臨床心理をつなげて考えてゆくの。今回もいじめの時と同様、類型・経過・原因・対応という4つに分けて順序立てて説明していくよ。」

①類型

たんの先生「まず一つのデータを提示するね。全国の中学校で長期欠席をしている生徒の欠席理由を調査したものだ。経済的あるいは宗教的理由で**不就学**だった者は約500人、**身体的病気**による者が約13,000人。そして**心理的な理由としての“学校が嫌い”**、例えば本当に学校がきらいな人というよりは行きたいけど行けないだけ、みたいな感じの生徒はここ十数年で急増して約70,000人にのぼったんだ(2003年)。」

イクオくん「全国の中学生在が約30万人なら、1クラスに1人は該当することになりますね。」

たんの先生「そうだね。そしてこの**心理的理由による長期欠席を広義の不登校**と言うんだ。」

キョウコさん「でも、その7万人がみんながみんな同じ理由で不登校、というわけでもないんですよね?」

たんの先生「うん、7万人の内訳としては、鬱病や統合失調症などの**精神病**によるもの、たんなる**怠惰・非行**によるもの、そしてさっき挙げたような“行きたいけど足がすくんで行けない”みたいな**神経症**によるものに分かれるんだ。神経病はここでやる範囲とはズレるし、非行によるものはこれまでやった非行への対策と同じようにすればよい。ただ、**狭義の不登校**にあたる神経症によるものについてはこれまでに挙げたのとは違った対策が必要になるんだ。その点についてここから話を進めていくよ。」

②経過

たんの先生「ここでは不登校になってからそれを克服するまでの流れの一例を見ていこう。まずその兆しとして、月曜の朝や学期明けに強い気だるさを感じるなどの**身体症状**を訴える。この時期はいわば**心気的な時期**なんだ。」

ロンちゃん「シンキテキ?」

たんの先生「例えば、腹痛や発熱を訴えて病院で診察してもらっても、実際には身体に異常が見られない、ということがある。これらの症状は要は思い込みによって生じたものなんだけど、こういうものを**心気的なもの**というんだ。」

イクオくん「あー、そう言えば今めっちゃ胃が痛いような…」

たんの先生「次の段階は**暴力・合理化の時期**。不登校の子供は学校に行かない理由(学校がつまらない、教師の教え方が悪い etc)を自分であれこれ設定し、**家庭内暴力**をふるったり或いはふるわされたりするんだ。子供にとってはこの時、“学校に行かなきゃ”という**登校強迫**と“学校に行くのが怖い”という**登校不安(恐怖)**によって葛藤に陥っていて、それが暴力につながると考えられているんだ。」

キョウコさん「なんか、かわいそうな気がしますね…」

たんの先生「3つ目の段階は**怠惰・内閉の時期**。葛藤のピークが過ぎると暴力の頻度は減るんだけど、逆に生活のリズムが乱れまくったり引きこもったりするなどするようになるんだ。でもこれはそんなに長くは続かなくて、外界へ興味を持つようになり外出したり登校を再開したりするという**回復期**になる。つまり、不登校の多くは自然に回復するものなんだ。」

③原因

たんの先生「それじゃあ次は不登校の原因を見ていこう。原因は大きく分けて3つあって、**家庭因**と**性格因**、そして**学校因**だ。家庭因というのは“親から離れたくない”という分離不安説で、性格因は単純に言うと自我の独立からの挫折だね。で、最近注目されるようになったのが**学校因**なんだ。ここでは特に学校因に注目していくね。」

(i) 不登校児へのアンケート

たんの先生「不登校の生徒に対して、不登校の理由を尋ねるアンケートが実施されたんだけど、その主な理由として挙げられたものは、**子供同士の関係**(友人になじめないなど)や**学級の雰囲気**(クラス内に出来た派閥に入れないなど)、**いじめ問題**などがあつたんだ。」

(ii) 森田洋司の調査

たんの先生「次に、前(第6回)にも登場した**森田洋司**という人の調査・意見。彼が言うには、表立っている不登校の生徒はあくまで氷山の一角だ、ということなんだ。」

キョウコさん「どういうことですか?」

たんの先生「まず、文科省の調べによると年50日以上休む中学生は全体の1~3%らしいんだが、年1~49日休んだ経験のある生徒は約17%居るし、遅刻や早退を経験した者は約25%、登校拒否感情を抱いたことのある者(学校に行くのが嫌だと思ったことがある者)は約67%にのぼり、学校を楽しんでいる生徒は全体の3分の1しか居ないそうだよ。」

イクオくん「僕は学校楽しいですけどね。休み時間とか昼休みとか放課後とか…」

ロンちゃん「イクオサンは授業には出ないのデスカ?」

たんの先生「ちなみに不登校が多い学年というのは中1から中3くらいとされ、これは**いじめや非行・校内暴力とも一致するんだ。**つまり、不登校も学校に要因があるのではないか、という仮説が立つわけだね。それじゃあ、続きは次回。」

第8回(6月14日) ―不登校(続き)と神経症― ※一部第9回の授業内容を含みます

たんの先生「今回は不登校の原因を見ている途中で終わっちゃったから、ここで改めて**不登校**やその周辺事項の**因果関係**について図を用いてみましょう。」

イクオくん「なんかまたややこしい図ですねえ…」

たんの先生「それだけ問題そのものがややこしいということだよ。まず不登校の大きな原因のひとつは前回見たとおり**学校状況**にある。それをこの図では**学校状況**が“**1次原因**”、**不登校**が“**1次結果**”という因果関係で示されているよね。」

キョウコさん「あれ、でも不登校が今度は“**2次原因**”でもある、と書いてありますが…」

たんの先生「そうなんだ。たとえば不登校によってその生徒本人は、これも前回見たけど、学校に行かなくちゃという**登校強迫**とそれでも学校に行くのが怖いという**登校不安**とのあいだで葛藤に陥ることになる。そしてその家族も生徒に対して不安になりしきりに登校を促す(**登校刺激**という)し、教師も熱心であればある程家庭訪問などの働きかけをするよね。つまりこれらは不登校という“**2次原因**”によって生じた“**2次結果**”というわけだ。で、これらの働きがかえって生徒にとっては追い詰めようになってしまい、強い不安や心気、暴力や引きこもりといった**神経症症状**が生じてしまう。ここでも更に、本人・家族・教師という“**3次原因**”によって**神経症症状**という“**3次結果**”が生まれてきてしまう、というわけなんだ。ちなみに**神経症症状**は学校に行けなくなると誰でも生じるものだとなっているよ。」

ロンちゃん「フクザツにからみ合っているのデスネ…」

イクオくん「あれ、ということは、神経症症状が不登校の原因ということではないんですか？」

たんの先生「よく分かったね。不登校は神経症の症状のひとつのように思われがちだけど、実際は逆で、不登校になった結果神経症症状が現れるんだよ。」

キョウコさん「それでは、こうした不登校の状況への**対策**にはどのようなものがあるのですか？」

たんの先生「そうだね、幾つかあるけど、まず一つめは①**学校状況の改善**だね(以下丸囲み数字は図7と一致する)。これまで見てきたような**いじめ対策**とか、**クラスの雰囲気**の改善といったもので、特に教師のなすべき仕事といえるね。今年6月に山口県で発生した光高校爆発事件でもいじめ問題が絡んでいたと言われているよ。次に②**登校刺激をやめる**こと。さっきも言ったけど、不登校児の家族はその生徒を心配する余り、学校へ行った方が良くとしきりに促しがちなんだけど、これはかえって**登校強迫**を強め**葛藤**を強めてしまうことになりかねない。だからむしろ、不登校を否定的なものとせず、学校へ行かなくても良いのだということを保証してあげることも大切なんだ。」

イクオくん「でも僕なら、学校に行かなくていいって言われたら喜んでテレビゲームやマンガに熱中しまくりそうな気がするなあ…」

ロンちゃん「Oh, タイダなのデスネ!」

たんの先生「まあそういう生徒も少なくないから、この手段には賛否両論がある。勿論そういう生徒には登校させる方向で指導すべきだし、生徒の態度や性格によって使い分けるべきと言えるね。」

キョウコさん「でも、神経症の症状が出てきた頃になるとそういった手段も効果が薄いんじゃないですか？」

たんの先生「そう、そこで次の段階の対策としては③**カウンセリングなどによる不安・葛藤の解消**になるわけだけど、他にも④**不登校の生徒のための場**をつくる、という方法もあるんだ。例えば公立だと、ほぼ全ての都道府県に不登校児を集めたクラスが設置されたり**夜間中学**というものが置かれたりしているし、私立では

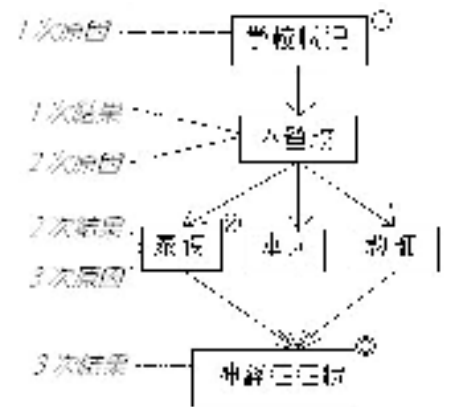


図7 不登校の図説

“東京シューレ”などのいわゆる**フリースクール**も多く存在している。」

キョウコさん「思ってたよりもだいぶ対応がなされてきているのですね。」

イクオくん「よし、それじゃあ僕も今日から大学の授業を次々休ん…」

キョウコさん「……」(無言でイクオくんハリセンチョップ)

●-----●

たんの先生「さて、ここからはちょっと臨床心理の話になるけど、**神経症(不安障害)**について見ていくよ。」

ロンちゃん「カッコの中にもうひとつ呼びかたがあるのはどうしてデスカ？」

たんの先生「**神経症**というと、どことなく差別めいた印象があるからね。最近では**不安障害**と呼ばれることの方が多いんだよ。まずは症状についてだけど、**精神障害**(この言い方も差別めいていると指摘されるが、他に適切な表現がないためここではこの言い方を用いる)にはその原因の所在から3つの種類があるんだ。1つは失語症やアルコール性健忘など、脳に明確な原因がある**外因性**のもの。1つは統合失調症や躁鬱病(そううつびょう)など、恐らく脳に原因があると思われるけど今のところ不明である**内因性**のもの。そしてもう1つは心身症などストレスや性格偏向を原因とする**心因性**のもので、ここで見る**神経症**はこの**心因性**の一種なんだ。ちなみに余談だけど、東京大学のT野教授は元々統合失調症の研究をしていて、生徒の心理などを研究するうちに教育の分野に進むようになったそうだよ。」

イクオくん「なんかどこかで聞いたことあるような名前のような…」

たんの先生「それじゃあ具体的な神経症の症状を幾つか見ていくよ。」

①パニック障害

たんの先生「これは或る時突然、急に動悸(どうき)がしたり過呼吸になったりするという**不安発作(パニック発作)**が起こって、その苦悶(くもん)感が強いと、発作が生じたのと似た場面になるとまたその苦悶に襲われるのではないかと恐れてしまう**予期不安**を抱くようになる。極端なケースだと、発作が起こったのと同じまたは同じような場所に行くのを恐れる**空間恐怖**とか、外に出ることさえ恐れる**外出恐怖**になることもあるんだ。こういった症状は一般の人の40%以上が経験していると言われ、薬物療法でおさまるようになっているんだよ。」

イクオくん「そうそう、だから僕あの講義の教室に行くのが怖くてさあ」

キョウコさん「嘘おっしやい」

②恐怖症

ロンちゃん「Aha、コレは聞いたことあるデス。コウショキョウフショウとかデスヨネ。」

たんの先生「そうだよ。でも恐怖症にも様々な種類があって、今ロンちゃんが言った高所恐怖症に代表される**空間への恐怖症**、これには他に閉所恐怖症とか、ヨーロッパに多い広場恐怖症なんてのもある。それに**物体への恐怖症**としては、ばい菌(不潔)恐怖症とか先端恐怖症、動物恐怖症などがあるし、赤面恐怖症や自己視線恐怖症、醜貌(しゅうぼう)恐怖症や自己臭恐怖症といった**対人恐怖症**は半数以上の人が抱いていると言われているんだ。」

イクオくん「自己視線恐怖症って何ですか？」

たんの先生「たとえば自分の視線が異常に鋭いと思っていて、自分が他の人を睨み付けている、と他人に思われるんじゃないかということを恐れることだよ。」

ロンちゃん「そう言えば、タンノセンセイもメガネをはずすとニランデるように見えマス。」

たんの先生「それはただ目が悪いだけじゃないかなあ…ちなみに、対人恐怖には**対人緊張**や**人見知り**といったようなものも含むから、本当にありふれているんだ。それだけじゃなくて、特に日本では文化的性格として、恥ずかしいと思う気持ちがないと“浮いて”しまうこともよくあるから、**或る程度の対人恐怖は必要**だとも言

えるんだ。」

ロンちゃん「Oh, 日本人は空にプカプカ浮けるのデスネ!」

キョウコさん「いや、そうでなくて…」

たんの先生「対人恐怖が最も出てくるのは中学生の頃。他人の目とかを気にする年頃だよね。でも、学校という同年齢で構成される集団から解放されると、具体的には大学を卒業し30歳を過ぎてくると、否が応でも社会に適応しなきゃいけなくなるから、対人恐怖はかなり減るとされているんだ。また、対人恐怖が出現しやすい状況というのでも幾つかあるんだ。例えば、“半知り”の人と接する時とか。」

ロンちゃん「Oh, シマ模様のユニフォームのヒト達デスネ!」

イクオくん「…それは“ハンシリ”でなくて“ハンシン”…、っていうか今日のロンちゃんのははじけてるね…」

たんの先生「“半知り”というのは、家族や友人ほどの親しさは無いけれど、全くの他人でもないという程度のある人のこと。具体的には例えば、顔は知っているけど名前は知らない同じアパートの住人とか、何となく苦手で話す機会が少ない人とかね。他に対人恐怖が出現しやすい状況の例だと、歳が離れた人と話すのは平気だが同年齢の人と話すのは苦手だとか、2人きりで話すのは構わないが3人だと妙に気を遣って苦手だとか。日本人に多い例だと、事務的な話は出来るけど雑談をするのは苦手だとかね。」

イクオくん「それじゃあ今から雑談しましょうか。」

キョウコさん「ページ数が足りないからやめて。」

③強迫

イクオくん「きょうはく…そりゃ脅されたら誰もが不安になるんじゃないか…」

キョウコさん「漢字が違うわよ」

たんの先生「そう、此处で言う強迫というのは、或る無意味な考えが頭にこびり付いてなかなか離れないっていう、これもまたあまり珍しくはない状態のことを言うんだ。意志に反して繰り返し立ち現れてきて、本人はそれを自覚しているというのが特徴だね。自覚しているだけより苦しいんだけど。」

ロンちゃん「グタイテキにはどんなケースがあるのデスカ?」

たんの先生「例えば、ついさっき手を洗ったばかりでもまた手を洗いたくなってしまう(=洗浄強迫)とか、階段の段数を数えないと気がすまなくなるとか、東京大学のT野教授が実際に見たことのある例だと、童謡“どんぐりころころ”の歌詞の節々が気になってどうしようもない、とかね。」

イクオくん「♪どんぶりころころどんぶらこ～」

キョウコさん「早速歌詞違うわよ」

たんの先生「こういったものは、例えば洗浄強迫の場合では本当に手が綺麗になったのかという確認行為に確実感が無く、本人が意識しないよう我慢したり他人が無理に抑えたりするとその不安が著しく募ったりするんだ。或る学者が提唱した基準としては、1日1時間以上その症状が現れて生活妨害的になったら(階段の例ではなかなか階段がのぼれなくて遅刻するなど)不安障害であるとされているんだ。」

イクオくん「そうそう、だから僕もよく授業に遅刻しちゃって…」

キョウコさん「言い訳にもなってないわよ」

たんの先生「まあでも、テストの名前を書いたかどうか何度も確認するなど、学校という場では多少強迫のある人の方がいきやすいという面もあるし、言い換えれば慎重さが強いということだから生活適応的でもあると言えるんだ。その慎重さが自分でコントロール出来なくなると暴走するとよくないけどね。」

イクオくん「よし、それじゃあ今後はもっと慎重になってもっと遅刻しよ…」

キョウコさん「……」(無言でハリセンチョップ)

たんの先生「さて、それじゃあまずは前の続きで、不安障害(＝神経症)の症状の例をあと一つ見てみるね。」

④ヒステリー

イクオくん「えー、僕日本史も世界史も苦手で…」

キョウコさん「さっそくそんなベタなボケはやめなさい」

たんの先生「まあヒステリーという言葉はやや語弊もあるし、多少差別感も含むから余り相応しくはないんだけど、これから挙げる2種類の症状の総称としてはこれ以外に都合のいい言葉がないから、此处ではヒステリーという言葉を使うね。その2種類の症状というのは、**転換症状**と**解離症状**だ。」

(i) 転換症状

たんの先生「**転換**、というのは元々心理学者のフロイトの造った言葉だけど、**心の葛藤が身体症状に転換される**という症状のことだよ。具体的には**運動障害**と**知覚障害**の2つがある。**運動障害**の例としては**失立**(直立できなくなる)や**失歩**(歩けなくなる)、**失声**(声が出せなくなる)や**麻痺・痙攣**(けいれん)などがあるんだ。」

イクオくん「立てなくなるって、例えば“アルプスの少女ハイジ”のクララみたいにですか?“わー、クララが立ったよ!”みたいな。」

キョウコさん「ばかね、そんなの作り話に決まってるじゃない、関係ないわよ。」

たんの先生「いいや、そうでもないよ。」

キョウコさん「うそおっ?!」

たんの先生「あの話でも、感動したクララが突然立てるようになるだろう。あれは**感動によって心の葛藤がほどけ**、そこから転換していた身体症状も消えた、という格好の事例なんだよ。」

キョウコさん「そうなんですか…。ごめんねイクオくん、あなたのことだからてっきりずっとんきょうなことを言っているのかと思っちゃって…。」

イクオくん「待って、僕どんなキャラなのさっ?!」

たんの先生「**知覚障害**の例だと、**視力や聴力が低下**したり、**皮膚感覚が減退**したりするなどだね。こういったものは**器質性の障害**(実際に身体に何らかの障害があること)でもなければ**詐病**(病気であると嘘をついていること)でもないから、結構不思議でドラマティックだよな。」

ロンちゃん「なんかヒトゴトみたいな言い方デス…」

(ii) 解離症状

たんの先生「**解離症状**というのは、**一過性の人格解体**、いわゆる**多重人格**というやつだね。」

ロンちゃん「Oh, ジキルとハイドデスネ!」

たんの先生「あるいは**解離性健忘**、いわゆる記憶喪失というものもあり、全く記憶がなくなること**を全健忘**というんだ。」

ロンちゃん「Oh, ピアノマンデスネ!」

キョウコさん「あるいは若人あきら(現・我修院達也)とか?」

イクオくん「うわ、しぶいトコ突いてきすぎてさっぱり分らないや。」

たんの先生「これも俄かには信じがたいものだけど、T野先生も軽井沢でそういう症状の人に会ったことがあるそうだよ。」

たんの先生「さて、色々と症状を見たから、今度はその原因と対応を見ていこう。」

①フロイトの精神分析療法

たんの先生「まずは心理学者の**フロイト**(Sigmund Freud)の概念から説明するんだけど…イクオくん、起きてるかい?」

イクオくん「……んあ…、はっ!!お、起きてますよっ、当たり前じゃないですかっ、別にフロイトとか出てきて難しそう
な話しそうだなとか思ったりなんかしてませんよっ…」

キョウコさん「はいはい。」

たんの先生「と、とりあえずかいつまんで説明を続けるよ。フロイト曰く、人を構成するのは**外界**に触れる**知覚**と、**意識**
や**自我**といった**現実原理**に基づくものの他に、**無意識(リビドー)**というものがある。それは性的欲求や破
壊欲求といった**快楽原理**に基づく原初的エネルギーで、時折何らかの形で意識や外界へと**のぼ**ってくる
んだ。普段は**超自我**というものがそれらを外に出しては**マズい**と判断して無意識に押し戻される(=**抑圧**
される)んだけど、その抑圧が強すぎて**欲求不満**が強くなりすぎると**不安障害**になってしまうんだ。例え
ば誰かを無意識に愛しているが何らかの事情で過度に抑圧しているといった状態の時に、その満たされ
ない欲望を足の痛みなどに置き換えて**代理満足**を果たすといったふうだね。つまり不安障害の場合 **どん**
な症状にも意味があるというわけだ。でもこれらは無意識のうちに充足してしまっているからなかなか
発見しづらいし治しづらいんだ。そこでフロイトが考え付いたのがかの有名な“**夢判断**”で、夢の中では
抑圧が緩んで欲求を自覚できる、つまり**夢とは隠れた願望の表現である**として……キョウコさん、ちょっ
とお願いできるかな」

キョウコさん「……」(無言でイクオくんハリセンチョップ)

イクオくん「っ痛えっ!!な、何すんのさっ…あ、ど、どうも…」

キョウコさん「…おはよ」

ロンちゃん「今のセンセイの話、聞いてマシタカ?」

イクオくん「き、聞いてたよっ、あれだろ、夢見ることは素晴らしいってヤツ」

キョウコさん「…聞いてなかったわね」

たんの先生「はいはい、とりあえず話続けるからね。ええと、今話した概念に基づいてフロイトは**精神分析療法**を公案
したんだ。まず**症状形成**のメカニズムとしては、何らかの**外傷体験(苦痛)**によって**強い不安**を抱き、それ
がたまたま**身体部位と連合**し、**強い情緒の抑圧**と重なると、**ヒステリー症状が形成**される。そこで、患者を
催眠状態にしたり**自由連想法**(思いついたことを何でも話してもらう)を用いたりして抑圧を取りやすく
し、**外傷体験の再生と抑圧された情緒の発散(=カタルシス)**を促すことで、**症状を消失させる(=除反応)**
という治療方法なんだ。最近では催眠法は個人差があるなどの理由から**自由連想法**を用いることが多い
けどね。詳しくはフロイトの著作を読むともっと深く理解できると思うよ。…分かったかな、イクオく
ん?」

イクオくん「……あ…?…あ、あ、あっ、あったり前じゃないですかっ…!だだ、大丈夫ですよっ…!!」

たんの先生「それじゃあ今私が言った内容をもう一度言ってもらえるかな?」

イクオくん「……………ごめんなさい」

たんの先生「ちなみに、フロイトの分析はのちに**ユング**(Carl Gustav Jung)やアートルーなどに継承され、ユングの流
れを汲むのが**河合隼雄氏**(現・京都大学名誉教授、文化庁長官)だね。」

②行動療法

※これ以降は第10回の授業内容のためありません。